

「富富富」の生育状況と当面の技術対策について

令和元年7月9日

農業技術課 広域普及指導センター

1 生育状況（実証ほデータ）

前年に比べて、草丈、葉齢、葉色は並み、茎数はやや多くなっている。

幼穂形成期は、前年より1日早い7月12日頃と見込まれる。

今後、気温が近年並みに推移すると、出穂期は、前年より1日早い8月1日頃と見込まれる。

表1 「富富富」の生育状況（7月9日 栽培実証ほ）

年次または 試験内容	ほ場数 (筆)	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (L)	葉色		幼穂 形成期	出穂期
				(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD		
R元	12	5月13日	61.1	27.6	597	11.7	4.2	39.9	(7/12)	(8/1)
H30	19	5月15日	59.4	25.9	568	11.6	4.3	39.2	7/13	8/2
H29	16	5月14日	57.5	28.3	585	11.3	4.3	39.7	7/12	8/3
前年比・差		-2	103	106	105	0.1	-0.1	0.7	(-1)	(-1)
早期田植栽培	6	5月4日	64.4	29.5	631	12.1	4.2	39.0	(7/9)	(7/29)
高品質安定栽培	6	5月15日	60.5	27.7	612	11.4	4.2	38.4	(7/13)	(8/2)

注) R元・平均: 生育観測栽培と高品質安定栽培・対照区(合計12ほ場)の平均

H30およびH29: 特別栽培米を除く、それぞれ19および16か所の平均

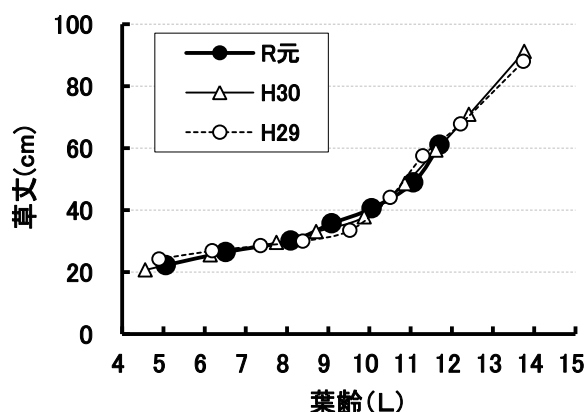


図1 草丈の推移（富富富実証ほ）

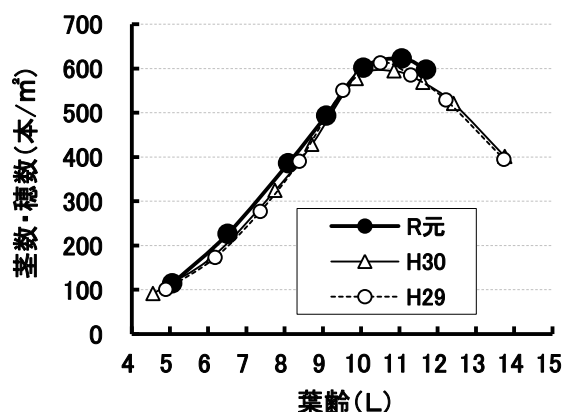


図2 茎数の推移（富富富実証ほ）

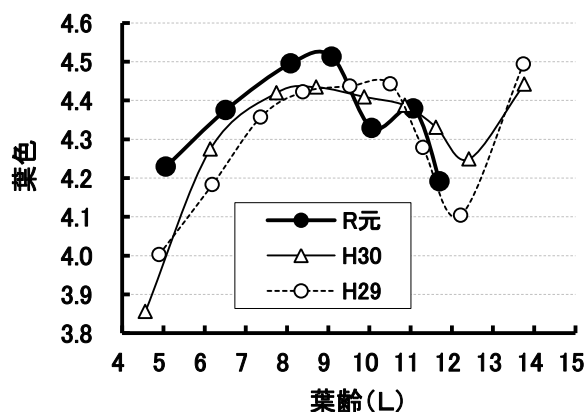


図3 葉色の推移（富富富実証ほ）

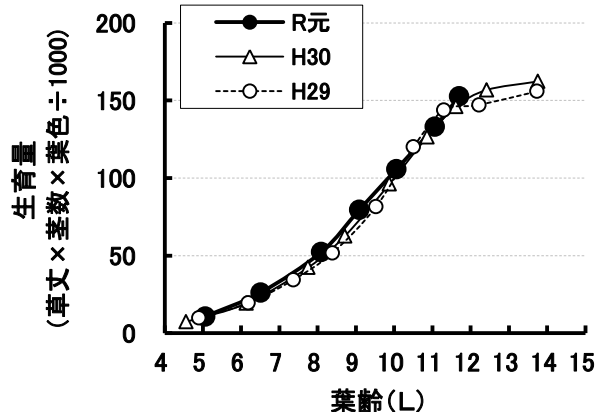


図4 生育量の推移（富富富実証ほ）

2 当面の技術対策

- ・ 茎数が多く葉色が濃いほ場が多いことから、①幼穂形成期までは落水期間が長めの間断かん水、②幼穂形成期から出穂期までは間断かん水を行う。
- ・ 分施栽培における穂肥は、1回目は幼穂形成期の7日後頃に窒素成分で 0.75～1.0kg/10a、2回目は1回目の7日後に窒素成分で 1.5kg/10a を基本とする。

(1) 水管理

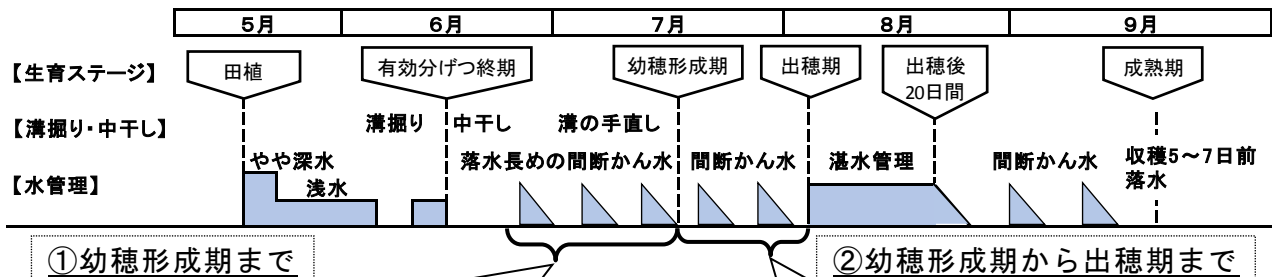
① 幼穂形成期まで

- ・ 茎数が多く葉色が濃いほ場が多いことから、幼穂形成期まで落水期間が長めの間断かん水を行い、幼穂形成期の SPAD 値 35（群落葉色 4.0 程度）に誘導する。
- ・ 地耐力が確保されていないほ場は、間断かん水により、幼穂形成期頃までに足跡の深さ 3cm 程度の土壌硬度に誘導する。

② 幼穂形成期から出穂期まで

- ・ 本年は、葉色が濃いほ場が多いことから、幼穂形成期から出穂期までは間断かん水を行い、過剰籾数を防ぐ。
- ・ ただし、幼穂形成期の茎数が 580 本/m²以下で、かつ SPAD 値 35（群落葉色 4.0）以下の場合には、飽水管理を行い、稲体や根の健全化を図る。

<水管理のイメージ>



R 元年産「富富富」では、茎数が多く葉色が濃いほ場が多いことから、幼穂形成期まで落水期間が長めの間断かん水を実施。

※マニュアルには、「飽水管理」と書かれているが、本年は、葉色が濃いほ場が多いことから、幼穂形成期から出穂期まで間断かん水を行う。

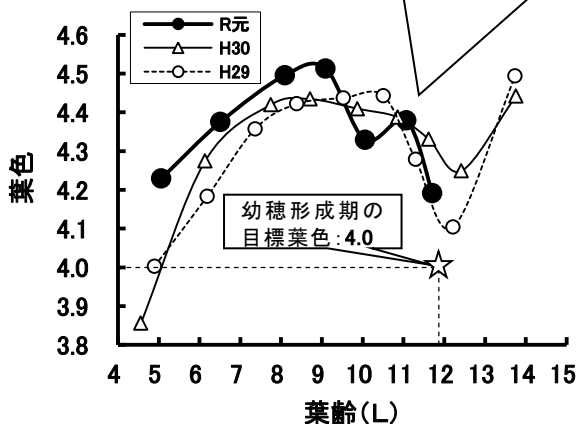


図5 葉色の推移（富富富実証ほ）

(2) 分施栽培における穂肥施用

- ・ 穂肥は1回目を幼穂形成期の7日後頃(幼穂長15mm程度)に窒素成分で0.75～1.0kg/10a施用し、2回目を1回目の7日後に1.5kg/10a施用する。
- ・ なお、幼穂形成期の茎数が580本/m²より多く、またはSAPD値が35(群落葉色4.0)より濃い場合は、1回目の穂肥を施用せず、幼穂形成期の14日後頃に窒素成分で1.5kg/10aを確実に施用する。

表2 幼穂形成期の生育の目安

草丈 (cm)	m ² 茎数 (本/m ²)	SPAD	群落葉色	生育量	
				SAPD	群落葉色
62	580	35	4.0	125	140

注) 生育量: 草丈 × 茎数 × 群落葉色 ÷ 1000

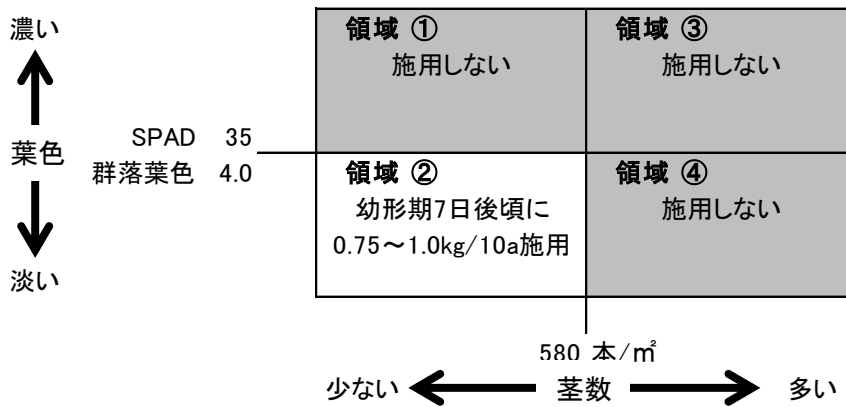


図6 幼穂形成期の生育に基づく1回目穂肥施用の目安
(R元年度暫定版)

(3) 全量基肥栽培における穂肥施用

- ・ 原則、追加穂肥は施用しない。
- ・ ただし、幼穂形成期の14日後のSPAD値32(群落葉色4.2)未満の場合は、出穂3日前(走り穂が確認される頃)までに窒素成分で1.0kg/10a程度の追加穂肥を行い、穂揃期のSPAD値35(群落葉色4.4)に誘導する。

(4) 病虫害および雑草防除

病虫害および雑草防除は、コシヒカリに準じて実施する。ただし、生育期間を通しての化学合成農薬の成分使用回数が12以内となるように留意する。

① カメムシ類

- ・ 畦畔等における斑点米カメムシ類の確認地点率は平年より高くなっている。
- ・ 早生品種の防除は、適期を逃さず、穂揃期(出穂3～5日後頃)と傾穂期の2回防除を徹底する。また、例年カメムシ類の発生密度が高い地域や、防除後も水田内のすくい取り調査で侵入が認められる場合は、追加防除を行う。
- ・ 近隣に雑草地や麦あと不作付地等がある水田では、カメムシ類の発生が多くなる場合があるので本田防除を徹底する。
- ・ 本田内のノビエやホタルイは、アカスジカスミカメの侵入を招き、斑点米被害を助長するので、除草に努める。

② 紋枯病 ※平年の初発確認日：6月23日 (R元：6月26日)

- ・ 前年多発したほ場で箱施薬剤を施用していない場合は、出穂3～4週間前（粒剤）または、品種ごとの散布適期（粉剤、液剤等）に防除を確実に行う。
- ・ その他のほ場では、要防除水準を参考にし、必要に応じて適期に防除を行う。

※「富富富」の要防除水準は「コシヒカリ」に準じる。

表3 紋枯病の薬剤散布適期と要防除基準

品種	薬剤散布適期 (防除要否判定時期)	要防除水準 (発病株率)
コシヒカリ	出穂10日前頃	15%

農薬散布に際しては、周辺住民への事前の周知と農薬の飛散防止を徹底する。